第 19 号　　平成6年5月15日

# 文化財やまと

大和町文化財保護協会発行

七鈴五獣鏡

## 古今伝授の里
### フィールドミュージアム内に於ける指定文化財の数々

会長　土松新逸

国指定名勝「東氏館跡庭園」を中心として「古今伝授の里フィールドミュージアム」が昨年七月にオープンされてから、ここを訪れる人が日毎に増えつつあり、しかも来訪者の多くから歴史・文化・環境的資源を生かされてある、この施設に感嘆の声を聞くことができることは、まことにご同慶の至りであります。

この「フィールドミュージアム」（野外博物館）には、東氏関係の歴史的遺産を保存公開する「東氏記念館」、和歌文学史を紹介する「和歌文学館」、ここに集う人々の活動や研修の場を提供する「篠脇山荘」、憩いの場の交流館「ももちどり」などが設備されているのでありますが、これらを創建された根本資源は、この一帯に保存されている数々の文化財であることを忘れてはならないでしょう。

申すまでもなく、五〇〇余年前の姿がほぼ完全に残されていた二〇〇㎡余りの池泉を中心とするすばらしい庭園遺構が検出された、国指定名勝「東氏館跡庭園」をはじめ、鎌倉～室町時代に約三四〇年間山田ノ庄を統治した和歌の名門東氏が二三〇余年間居城を構えていた県指定史跡「篠脇城跡」や篠脇城の馬場跡といわれている、昔から郡上の桜の名所でもあり、東西の両端には樹齢八〇〇年に及ぶ二大杉のそびえている二三〇ｍの桜並木を含む県指定天然記念物「明建神社の社叢」、また中世から現代に至るまで同じ型式と宮座制をまもりつづけている県指定無形民俗文化財「明建神社の七日祭り」や、東氏唯一の尼寺東林寺跡から出土した県指定歴史資料「東林寺跡出土品と出土記録」などがある。また、町指定文化財では寛文八年（一六六八）八幡城主遠藤常友が守護神妙見大菩薩（現明建神社の本尊）へ奉納した狩野派和田平左衛門尉安貞画の「馬の絵馬」、翌寛文九年遠藤家の重臣たちが城主の病気平癒を感謝して妙見神社（現明建神社）へ奉納した「鰐口」、妙見神社の別当寺であった尊星王院跡から出土した鎌倉期の工芸品「四耳壺」、かんじょう寺跡から出土した鎌倉期の工芸品「古瀬戸灰釉瓶子」、東氏家臣団の住居跡と思われる妙見の里から出土した鎌倉期の工芸品「瀬戸灰釉小鳥型水滴」、明建神社本殿内に保管されてある超小型の工芸品「石造狛犬」、牧仏ヶ洞から流出して拾い上げられたという「伝木蛇寺本尊」、など、また、嘉吉元年（一四四一）この地方が大旱ばつのとき、妙見神社の神主の娘千代が神に祈って出水したと伝える史跡「木戸口清水」、篠脇城主夫人の墓と伝える史跡「慈永大姉の墓」（室町期石造宝篋印塔）、東氏尼寺跡史跡「東林寺跡古墓群」（室町期）など、さらに、天然記念物として町指定となったものに、篠脇城跡下の「滝日家のしだれ梅」（約四〇〇年）同「滝日家のイチイ」（約四五〇年）「滝日義一家の五葉松」（約五〇〇年）牧「水神神社のむくろじ」（約二五〇年）などがありまた、享保七年（一七二二）建立の「明建神社の本殿」が建造物として指定されました。これらを集計すれば

| 種別＼指定別 | 国 | 県 | 町 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 名勝 | 一 | | | 一 |
| 史跡 | | 一 | 三 | 四 |
| 天然記念物 | | 一 | 四 | 五 |
| 絵画 | | | 一 | 一 |
| 彫刻 | | | 二 | 二 |
| 無形民俗 | | 一 | | 一 |
| 歴史資料 | | 一 | | 一 |
| 工芸品 | | | 五 | 五 |
| 建造物 | | | 一 | 一 |
| 計 | 一 | 四 | 六 | 三 |

となります。現在大和町の指定文化財は一一九件になっているが、その内の二一件はこのフィールドミュージアム内にあり、しかも、国・県の指定一一件のうち五件がこの区域内にある状態であります。

なお、岐阜県遺跡台帳登載遺跡に「木戸口塚・田口谷一号塚・同二号塚・同三号塚・木蛇寺跡」などもあり、この一帯に残っている歴史的資源が如何に多いことに心しなければならないでしょう。

# 剣阿千葉の木蛇寺

## ―山田助右衛門道場―

畑中浄園

承久三年（一二二一）東胤行が山田庄を加領され、以後行氏・時常にいたる三代およそ九〇余年間現在の上剣字阿千葉の地に居住し、下総から東氏の守護神妙見神社をこの地に勧請したことは周知の通りである。

鎌倉時代は、天台・真言の旧仏教にかわって、道元・栄西が入宋してもたらした曹洞宗・臨済宗、日蓮の日蓮宗、親鸞の浄土真宗が新仏教として登場した。浄土真宗は庶民の宗教として農民・漁民の間に教線をのばし、道元の曹洞宗が公家や武家の権威をきらってこれに近づかなかったのに対し、日蓮宗と臨済宗は武家の信仰をあつめた。

古代の貴族がそれぞれ氏寺（菩提寺）を建立したが、中世の武家もまたその菩提寺を建てるようになった。阿千葉の木蛇寺は東氏の菩提寺であった。その建立について『郡上郡史』は大略次のように述べている。

東氏の支族に徳瓊（とくけい）という臨済宗の高僧があり、大覚禅師（蘭溪道隆）の高弟で学徳に勝れていた。胤行の後をついた行氏が、阿千葉の城南に一宇を建立して木蛇寺と名づけ、この徳瓊を開基とし東家の菩提寺とした。これが郡上の禅宗の始めである。木蛇寺の第二代も同じく東氏の支族から出た高僧徳見（竜山）で、以降代々東氏の一族をもって寺主とした。

また、『郡上郡史』は、『本朝高伝』によって次のように述べている。

徳瓊は相模国寿福寺の禅僧、字（あざな）は曳林（そうりん）、俗姓千葉氏、大覚禅師の門に入り、のち宋に渡って高徳の諸師を訪ね、帰国後は鎌倉の禅興寺・寿福寺にとどまった。没年不詳。また、徳見竜山は下総国香取郡の人、一五歳で出家、中国に渡り天童山（浙江省）に登り東巌に学ぶ。帰国して南禅寺・天竜寺に住持し、七五歳で没した。朝廷から徳見の学徳に対して真源大昭禅師の号を賜った。

次に徳瓊の師大覚禅師（蘭溪道隆）は『望月仏教辞典』によると、中国の四川省重慶に生まれ、一三歳で出家し成都の大慈寺に入った。寛延四年（一二四六）三三歳で来朝し、京都の泉涌寺・建仁寺、鎌倉の興禅寺・寿福寺等に住持した。幕府の執権北条時宗の信任が厚かった。その弟子は主なもの二四人あり、その一人が徳瓊である。

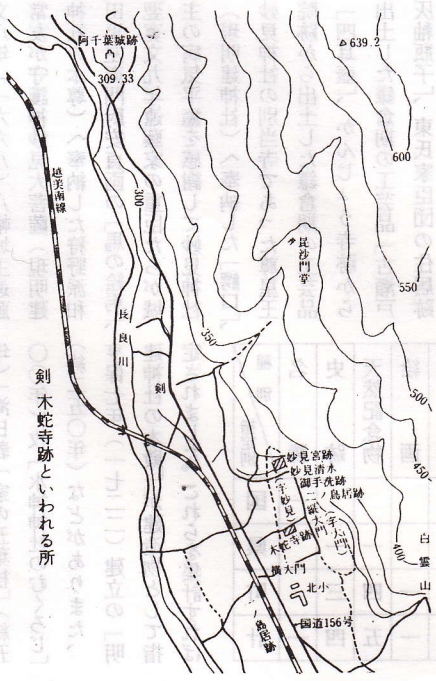
以上の如く創建された木蛇寺の住持は当時の日本でもとくに秀れた禅僧であったことは注目されねばならない。

次に、木蛇寺の寺名は特異な名称で奇異に思われる。『郡上郡史』は、東家の氏神妙見神社のご神体の妙見菩薩の絵像に白蛇が画かれている所から名づけたものか、または、本尊が蛇木で彫刻されていたのではないかともいっているが、蛇木とはどんな木か疑問は残る。

蛇は竜の類属で、竜は古来仏教を守護する動物である。木蛇寺出身の学僧が竜の字を名まえにつけたこともうなずける。また蛇は星の名の一つともいう。何れにしても妙見菩薩との関連を思わせる寺号である。

阿千葉城主三代時常の死（正和元年一三一二）によって、その後をついた氏村は篠脇の城に移った。従って妙見神社も牧に移され、木蛇寺も当然牧に移された。その後阿千葉の木蛇寺は廃寺として朽ち果てたのであろうか。

野田恒夫家の過去帳によると、東宮内少輔縁数の子孫上総介胤繁が、長享年中（一四八七～八八）加賀の一向一揆にかかわり、富樫介と合戦した。（加賀の一向一揆は、長享二年加賀の守護富樫正親を倒し、以後九〇年間加賀一国を支配した）其の後永正一二年（一五一五）七月石山本願寺に参詣し上人（実如）の弟子となり、法名釈了正と賜り、本尊一幅と名号を授与され、山田庄野田郷剣村按察（あぜ）千葉木蛇寺常庵和尚の旧地に一宇を営み、この本尊と名号を安置したという。この野田郷は東氏一族の野田氏が郷士として支配したと思われるが、何時ごろ成立したのかその起源は不明である。長禄元年（一四五七）蓮如上人下付の長徳寺の阿弥陀如来絵像の裏書に濃州郡上郡野田郷馬場村とある。




剣 木蛇寺跡といわれる所

なお当過去帳には野田郷の左に異筆で山田村河辺居寺口の少し北に五重の石塔あり、これより上保村中津屋和田川までを野田郷と号せしなりと加筆してある。

また、按察千葉という地名について、阿察地千葉のぜちの二字を略して阿千葉という。

あぜは畔、あぜちは畔内とかき北陸地方や岐阜県では分家をさす（広辞苑）というなど諸説があるが、阿は人を呼ぶのに親しみを表わして冠する語（同上）であり、仏教では阿は梵語の第一母字で、万物の原理を示す字で大切な字となっている。従って阿千葉をすなおに考えれば、本家の千葉を親しみ尊んでつけられた地名と考えても差しつかえないのではないか。

実如上人下付の本尊

なお、木蛇寺のあった位置は、図に示すように、妙見宮跡から約二〇〇m南の所に、野田家の墓所がある。この墓所は東西に細長く低いブロックで囲まれ、西側は南北四m、東西約八m、東側は約二・四mで、向かって左側に野田家の石の墓標が立ち、その後ろに、過去帳にある通り、「釈了正、永正十六年卯七月廿一日」という古い墓石が立っている。その外数基の墓石と、数個の五輪の残欠がある。周囲は開墾された田になっているが、この辺一帯が木蛇寺の跡と考えられる。

本題にもどって、木蛇寺常庵和尚の旧地に、了正が一宇を立てたということは、かつて常庵が阿千葉の木蛇寺に住持していたことをもの語り、従って牧に移った後も阿千葉の木蛇寺は存続していたことになる。

常庵は常縁の子（乗性寺の東氏系図では氏数の子）で、法名釈竜崇といい、正宗竜統（常縁の弟）の甥である。五歳で得度し、叔父正宗竜統のもとで勉学した秀才で、永正一四年（一五一七）四八歳で建仁寺の住職となった。（大和村史上巻五〇三頁）乗性寺蔵の東氏系図では、「常庵住木蛇寺釈竜崇」といい、日置家蔵の系図は「久留主木蛇寺ニ住ス釈竜崇」、千馬家蔵の系図は「木蛇寺住職、後遷京建仁寺霊泉院」とある。

何れにしても常庵竜崇は牧の木蛇寺の住職時代、阿千葉の木蛇寺の住職を兼ねていたのであろう。禅の修行と勉学のため、恐らく早くから京都に遊学し、阿千葉の木蛇寺はほとんどかえりみられなく、その建物も次第に老朽化していたことであろう。

石山本願寺で実如上人の弟子となった了正は、この地に一宇を建立して、上人から授かった本尊と名号を安置したのである。従って以後の木蛇寺は浄土真宗となったのである。

了正のあと、了雲・了海・了照と相続したが、了照は勇烈力量人にすぐれ、武道を好み、寺務をきらい、阿千葉の木蛇寺を出て還俗し野田五右衛門と改名し、大隈守胤俊に仕えた。

胤俊は常縁の曽孫胤縁の子で、江州堅田で討ち死にした（日置家蔵東家系図史料編一五頁）五右衛門は、その陣中で主君と共に戦死したのである。この合戦は石山本願寺の顕如の要請によって、浅井・朝倉が信長と近江の堅田での戦いで、胤俊・五右衛門の主従がこの戦いに参加して奮戦したのであった。

了照が還俗して木蛇寺を出た元亀年間（一五七〇～七二）以来、木蛇寺は無住となり、その本尊と名号は、剣と万場の門徒が隔年に預かり安置した。慶長一九年（一六一四）春以来万場の上田（うえだ）という家（現黒岩幹夫家で屋号は徳左）で安置したが、剣村の林孫兵衛という者が不思議の霊夢をみて、その夢告によって直ちに本尊と名号を剣の大門の浄正方に安置したという。浄正については判然としないが、現在の山田助雄氏（屋号助右衛門）の剣道場の発端となった。

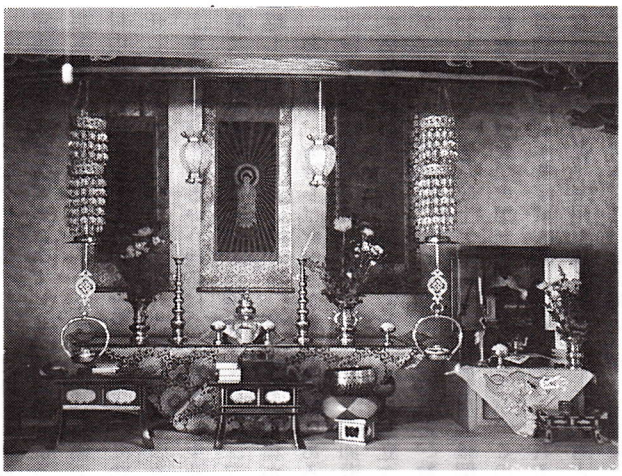
現在の山田助雄家では、新築の家屋にもかかわらず、古来の道場形式を踏襲して二間の内陣を造り込みにし、中央に本尊阿弥陀如来絵像を安置、その裏がきの写しに

野田家の墓　この付近に木蛇寺があった

は、「大谷本願寺釈実如㊞　永正十二乙亥七月廿八日　照蓮寺門徒濃州郡上郡山田庄野田郷阿千葉願主了正」とあって、野田家の過去帳と全く一致する。本尊の向かって左の草書体の実如染筆の六字名号は、了正が本尊と一緒に実如上人から授与されたものに間違いない。向かって右は蓮如上人の染筆行書体の六字名号であるが、この名号がいつ下付されたのか不明であるが野田氏一族の石山本願寺援護の功績に対して下付されたものと考えられる。何れにしてもこの三幅は享和三年（一八〇三）高山御坊の輪番法泉寺から御真筆証明書が出されている。

この道場は直参同行として、高山照蓮寺下であったが、江戸初期高山から長敬寺が八幡に移って、郡上の照蓮寺下の二十数ヵ寺は長敬寺下となった。この道場も同様で、今日に至るまで、毎年の十二月初めには、この道場では長敬寺を招いて報恩講がつとめられている。一般寺院と同じように、勤行・御伝鈔拝読・法話が行われ多数の参詣者がある。以前は二日間であったが近年になって一日になった。（山田助雄氏夫人談）

いずれにしても、鎌倉時代に創建された東氏の菩提寺木蛇寺の遺蹟が、このような形で現在に伝えられていることは特筆されねばならない。



山田助雄氏道場内陣

## 随想

# 人間と蛸の生涯

村井正蔵

何かの本で読んだ記憶を回想して思うことがあります。それは海中に住む蛸の話ですが、その蛸が成長し子孫存続の目的をもって交尾することは自然のことであります。その蛸が妊娠末期ともなるとこれまで生活をしていた穴（住家）に戻り何日かじっとして分娩を待っているのだそうです。

その間は外に出て餌を探したり食べたりすることはなく、じっとして動かずにいるそうです。しかし生きている以上空腹を覚えて仕方なくなった時には、自分の八本の足を端から食べて空腹をみたし分娩を待ちながら何日かを過している。そして、時期到来して分娩が始まり沢山の産卵、続いてその卵が孵化して親蛸の面前を、ぐるぐる廻り出すそうです。

親蛸はその様子を生のよろこびと安心感をもって見つめている中に、次第に視力が衰えてボーッとなり、見えなくなる頃、親蛸の体力にも限界が訪れてついにパッタリと倒れ一生を終るそうです。

蛸の寿命が何年ぐらいであるかは私にはわかりませんが、「万物の霊長を誇示している人間の顛末も蛸の生涯に共通しているのではないか」という事を思うのです。

人間の成長期を二〇～五〇歳と考え、その間には種々雑多な私、社会生活に懸命の努力を重ねて、ひた走りに進んで来た足跡は、それぞれの人達ごとに忘れることの出来ない思い出の歴史が秘められております。

世界での長寿国といわれる国に生まれ、現在の恵まれた環境は考え方によっては幸せな人生といえましょう。しかし、このような人生からも一度はお別れしなければならないことは否めないことです。健全である限り懸命に働いて得た財もすべてを残して旅立つ時が日一日と進んでいるのが私達なのです。してみると前述の海中の蛸と余り変らない一生と思えるのです。

こんなことを感ずるのは私の偏見なのでしょうか。

蛸と人間が同じように一生を終わるとしたら情けない様な気がいたします。蛸には聞けないだろう無言の声を聞き、人間として生まれ得た他の生物との違いと幸せを味わいたいものです。

## 教育功労者（文化財保護）氏名

| | |
|---|---|
| 町長表彰 | 森藤幸<br>土松新逸<br>有代信吾 |
| 教育委員会表彰 | 森藤幸<br>土松新逸<br>有代信吾<br>畑中浄園<br>佐藤とき子<br>高橋義一 |

# 「白雲山遺跡」が語る 二千年の歴史

高橋 義一

## まえがき

㈠ 大和町史編集事業が始まって間も無く、故青木卦二さん・同佐藤佐市郎さん・同加藤勝二さんら、「観音堂講」の主な方々の案内で、白雲山の調査をしました。

まず、白雲山の小堂祠に祭られてきた小金銅仏を拝見しました。堂祠は天保四年（一八三三）、大間見・剣両村の有志により、山のあちこちで拾った小仏を納めるために建てられたものですが、明治二二年再建されています。

鋳造の**座像金銅仏四体**は、四センチから六センチの間のものです。みな鎌倉期作とみられ、黒焦げで円鏡を失った掛仏でした。（町重文）

小堂祠のある所は、**古寺堂礎石遺構**のどまん中で、その結構の大きさと大きな河原石に驚きました。

そして堂祠内に**磨製石斧**二個と**弥生式扶入磨製石斧**一個を発見して、さらに驚きました。扶入石斧は、弥生前期（紀前三～二世紀）で、農具を作る工具のみの働きをし、郡内では、明宝村小川浄福寺さんに一個見るだけです。従って、のち町重文に指定されます。

さらに、小堂祠西方の**古池・古井戸**にも強くひかれ、その西高段の**五輪塔の白雲山中世古墓群**（町の史跡）のうらぶれた姿に、当山のえたい知れぬ歴史を感じました。

その後、名大考古学教室に依頼して、古墓群中の上段四基、通称大和尚の墓を発掘調査しました。

しかし明らかな盗掘で、前期古瀬戸陶器破片が散乱し、かろうじて、**中国皇宋銭**（一〇三八）一個と、灯籠の吊り金具とみられるもの一個を発見しただけです。

昭和五五年ころ、青木さんが偶然下段墓地から、**古瀬戸灰釉四耳壺**（町重文）の骨壺を発見して色めきました。

その後また青木さんが、同墓地の盗掘を知って、墓地の全面的発掘を依頼されました。そして、何としても白雲山の歴史を解明して欲しいと要望されたが、それが遺言のようになってしまいました。

㈡ やっと念願がかない、町教育委員会主体で、**白雲山遺跡**と銘打って、昨年から発掘調査に入り、まず、下段の古墓群地を手掛けました。

予想した通り、盗掘がひどく、骨壺の古瀬戸陶器片が、無数に散乱する有り様。どうにか、完形品四個の出土に喚声をあげ、また、「福」と刻字した**鈕付銅印**を発見して、興奮しました。鈕とはつまみのことで、有孔型です。吉祥印として副え印にする平安期のものと考えます。

当然、寺の銘のある印があるはずで、次回の発見が待たれます。

他の事例から、次のような用い方になりましょう。

美濃国山田庄〇〇観音寺□（寺銘印）
[ ]（吉祥印）

その外の出土物として、

①古墳時代の**須恵器**片。
②猿投窯系**白瓷器**片。中国製白磁器に似て、精工で白く、きめ細かい素焼き物。奈良時代末から平安時代にかけ、官・国・郡の役所などに用いられ、一般用ではありません。
③早期作とみられる**天目茶碗**片。
④中国製とみられる**硯**片。

等々、思いがけない物が出ましたが、まだ発表する段階にないので、詳しくはごかんべんを。

＊　＊　＊

以上三反余りに広がる「白雲山遺跡」の遺構と、前々に採集された遺物からして、町史編集当初から温めて来た「白雲山の歴史」を、一挙に解かせる思いがし、なお熟考すべきですが、ここに一応の展開を試みます。

## 一、白雲山は農耕神の祭壇場 麓は弥生の水田帯

**弥生稲作の浸透**　一五六号線新国道が、剣中矢田に布設の工事中、地下一メートル辺りから出土した弥生初期の**水神平式土器**は、農耕文化浸透始まりの証拠品として、貴重なものです（町重文）。

縄文遺跡の多い白雲山下、大間見・剣を中心にした縄文人は、農耕文化を伴って侵入して来た弥生人に同化し、稲作主体の集落共同体のムラを作ってゆきます。

新観音堂を取りまく古寺堂礎石

白雲山の湧水による、大間見～剣にわたる湿田帯は、二四〇〇年前の太古に開き始めたわけです。

剣矢田（上・中・下）の広範囲の田んぼは、剣始まって以来のものと、口伝されると古老の話にありました。江戸時代からの盆踊りにも謡われた、郡内随一の「剣千石田」、その本田中にあります。

**弥生時代の祭壇**　弥生時代の稲作は、農耕神の元に行われ、白雲山は、麓の水田帯に降りて来る神の山として、当然祭壇が設けられていました。ずっと以前、岐阜金華山塊の弥生遺跡から、後漢方格内行花紋鏡などが出土し、祭壇遺跡と推定されたことがあります。

白雲山祭壇場は、子孫に引き継がれ、後世そこに神仏習合の大寺堂が建ったが、数世紀後に焼失。それは東氏郡上入部（一二二一）以降とみられるので、再興もなく、江戸期後半、供養のための小堂祠が建つわけです。

**祭壇に供した農工具石器**　石器時代から石信仰は強く、鏡ならぬ前掲弥生農工具を祭壇に供したが、後代の寺堂焼失と共に祭壇も廃れ、石器はその場に放置された。そして江戸期小堂祠建立時、雷の落とし共に小堂祠に納められたものと思います。

もしこの石器が、白雲山麓の住居地にあったら、水神平式土器と同様、地中深く埋没して、ついに姿見ることが無かったでしょう。

## 二、ヤマト政権直属領・県（あがた）（六世紀）
## 白雲山は県主の祭祠場

**県主の五獣七鈴鏡**（県重文）　ヤマト政権は、四世紀に大形古墳が形成されるころ確立します。

ヤマト政権が全国的に拡張し、隷属した地方小族長級にも、小古墳が造られますが群をなすので、家族墳とよばれます。

大和町薬師平古墳群がそれで（滅失）、副葬品から六世紀半ばの造築と推定されます。その副葬品の一つ、本誌見出しの写真にある五獣七鈴鏡は、ヤマト政権から、白雲山下の族長に与えられたもの。

また名皿部白山神社の棟札にみる「県大明神」は、ヤマト政権の県主に任ぜられた白雲山下の族長が、自分の祖神を祭ったもの。

また、記紀には王権に直属する大小の県が無数にあり、『古事記伝』には、王室直属民「名代部」の中に、「矢田部」とよぶ農耕隷属民が見られ、県の民の後裔と思われます。以上を心にとめて、次の状況をにらみ合わせます。

**白雲山中心の地理的状況と県主居住地**　白雲山は地上高二七〇メートル、標高五六〇メートル。薬師平は白雲山南方四〇〇メートル、大間見川左岸に立ち地上高五〇メートル。名皿部白山神社・高殿（たかどの）は白雲山西方八五〇メートル、長良川右岸にあります。白雲山は、長良川とその支流大間見川の合流した所の河岸段丘に立ち、二～三段目辺りの段丘に湿田帯があって、曲（かね）の手のように白雲山を南・西から囲うわけです。

ここで、族長・県主の所在地を想定します。それは大間見川の作る河岸段丘で、大間見字横地。日置繁さん宅辺りで、同宅の南方の段丘に「りょうけ」という地名が残っていますが、これは後代の、山田庄領家代（領主・領家の代官）で、地方の通称「りょうけ」居住地の名残りです。地域の族長（国造（くにのみやつこ）・県主）らは、律令制下でも大方役職を与えられ、前自領統治を委ねられます。平安末期には、その郷長職にある者は皇室・権門・大寺社に寄進し、領家代・荘官として身の安泰を期すので、横地の「りょうけ」を、当初からの族長と見るわけです。

なお日置さんは、近辺で石器・土器類を沢山表採されています。

**白雲山古代史の推測**　そこで次のような歴史が推測できます。

越（こし）の荒夷（あらえびす）は仲々ヤマト政権に服従しません。飛騨にもいるとみえます。長良川沿線は、彼等の易い侵入路です。ヤマト政権直属領・県の多くある濃尾の、北辺の尖兵（せんぺい）的守りとしてここ白雲山下の族長が、県主に任ぜられ王朝とのきずなを固めるために、五獣七鈴鏡が与えられます。

県は王朝を守って特に祭祀性が強く、それに祭祀性の強い鈴鏡が与えられるのは、もっとも

七尺幅のポールの間の足元に三段の石段が埋まる　露出している石段は残欠であった

な話。

そして白雲山にある弥生以来の先祖の祭壇では、県一族が集まり、県主自ら豊作を祈願します。この時、県の巫女（みこ）が鈴鏡を鳴らして舞い、鈴音が山上に響いたと思うと、私もなんだか恍惚となります。

一方、名皿部猪鹿津（いかつ）の高殿（たかどの）には、県主が祖神を祭り、祝（はふり）が常駐して仕えます。

鈴鏡を戴いた県主が死んで、一族の墳墓の地、薬師平古墳の一つに、鏡と共に埋葬されます。

その後、当地県族の後裔は、王

朝直属の部民・名代部となり、祖神「県大明神」を祭った「名代部の宮」が、後代「名皿部の宮」となり、慶長年間「白山神」が勧請され、さらに後、白山神社が主体のような宮になりました。戦後「縣大明神」という一本の布製のぼりが、心ない者に破棄されたが、これは戦前万場の三島神主が「貴いものだから大切に」と言っていたといいます。（祢宜故下広茂一さん談）

また名代部の中の「矢田部」の田が、後に「矢田」となったとする。相通じた所があるので、これもあながちにこじつけではございますまい。

## 三、弘法大師（七七四～八三五）

### 栗垣郷の長滝・白雲山に留錫

**白雲山祭壇の位置**　白雲山観音堂境内は、三反余りの面積があります。七堂伽藍（ここでは僧坊の意味らしい）があったと伝える南面の細長い下段。古寺堂礎石と新堂のある東面の段。古池のある一番広い中央段。石造三十三観音中、十七・十八・十九番観音のある北面の上段。五輪塔墓群のある西面の段。併せ五段の境内になっています。

昨年、中央段から上段に登る石段の最下段に、なお土に埋まっているのが三段あって、七尺幅もあることを発見しました。それは十八番様の真正面にあって、七尺の幅をもつ一二～三段の石段であったわけです。驚きました。

この十八番様と六～七メートル東の十九番様に限り、台座下に多くの石が築かれ、敷き石もあります。他の観音様にはありません。おそらく元々そこに石築きの壇があったので、その石を利用したものと思われます。

しかも十八番様は、三十三番中の中心的な観音で、観音命日を十八日とするゆえんだと申します。

したがって、上段境内の十八番様の辺に、古来からの祭壇があって、七尺幅の石段を十余段登って、族長らが恭しく祭祀を行ったと考えるわけです。

**弘法大師白雲山に密教修法**　九世紀初頭、遣唐僧空海は、唐代随一の真言密教者青竜寺恵果から、密教全部を驚異的短期間に伝授して帰朝し、日本真言宗を開きます。その修法力は王朝、貴族間、全国を風びしすごい人気を呼びます。

そして空海が、郡上・飛騨にも巡錫したことが、ほぼ立証できて『郡上史談』に連載しています。

空海五九歳ころ、白山登山道が美濃・越前・加賀の三方から開通したので、「加賀国真言別院高雄山寺」という京都真言高雄山寺（神護寺）の密教別院を建て、白山をその修行場にします。美濃白山馬場長滝社（「真鏡」）と連携し、弟子たちの修行を指導するため、同社に留錫したというわけです。

したがって、白雲山下県主の末裔は、自然栗垣郷（当時はまだ武儀郡下）の郷長になっていようから、空海が長滝に来たとなれば、祭壇の加持や仏事にも、彼を招かないはずはありません。

現在、白鳥町大島猪島政美さんとこに、弘法大師が一夜の馳走の礼に置いていったという「弘法さまの鏡」と、その伝説があるが、根も葉もない話とは思えません。

**「天野の宮」密教守護神牛頭天王**　白雲山東裏山麓に、真言宗高野山密教守護神「天野社」と同じ、「天野の宮」があります。いつから「白山神社」と改称したのか定かではありません。しかしなお地元では「天野の宮」と呼んで、明らかに牛頭天王像を祀っています。

牛頭天王は、密教に従いて印度から渡って来た密教守護の神です。

高野山の「天野社」・「天野明神」は、天皇・天王に対する不敬を慮って、初めから当て字されたものと考えます。

密教の空海が白雲山に招かれて、神ながらの神の祭壇に対して、十一面観音などの、密教修法の仏を本地とする堂宇を建て、白山方向の街道沿いに、牛頭天王を祀らせた――とは、これももうろく老のたわごとではございませぬ。長談義はなまあくびの元。以下次回へ。

**報告事項**

## 文化財保護関係 教育功労者の表彰につい

事務局

文化の香り高い町づくりを目ざす大和町においては、本年三月十二日生涯教育振興大会（従来の教育振興大会）に於て、「生涯学習の町宣言を行うと同時に、席上それぞれの部門に於ける、多くの教育功労者の表彰が行われました。

文化財保護関係では、町長表彰並びに教育委員会表彰として、六氏が栄えの受彰をせられましたので、心からそのご栄誉を讃え惜しみなき感謝の念を捧げたいと思います。

何方にも長年に亘り町史編集委員としてご活躍いただいた方々であり、その後も引続き町の文化財審議会委員をも歴任せられて、文化財保護の分野では、真摯な研究、発掘、保護の活動を続けていただいております。

因みにボランティアとして今手がけられている町史資料編続編と、冊子「大和町の文化財改訂版」は何れも目下大変なご努力が払われつつあります。

何れもご高齢の方が多いので、ご自愛下さって益々ご健康を保持せられ後進のために、大和町の歴史と文化財の「かたりべ」として、お骨折り下さいますことを祈念して報告とします。（表彰された方の氏名は四頁に掲載しました）

## ― 春の一泊旅行に参加して ―

# 宗祇墓所定輪寺に詣でて

有代信吾

平成六年二月二一日夜来の雨の中を一行三八名、岐阜乗合のバスで裾野市の定輪寺・三島大社・鎌倉を訪ねての旅に出発した。途中沼津市の第一プラザで昼食、ここで予ねて案内をお願いしていた沼津市の野口摂雄君と落合って、彼の車の先導で宗祇の墓のある裾野市の定輪寺に向かう。定輪寺では野口君の手配のおかげで中村住職が快く迎えて下さる。早速宗祇の墓にしきびの花と線香をお供えしてお参りする。お参りしているうちに雨が上がり薄日がさしてきて有り難かった。墓は割と小さな五輪塔で近くに句碑が二基ある。墓の横の案内標には大要次の様に書かれている。

宗祇の墓所

(前略)当寺を訪れたのは文正元年四十六才、応仁の乱を避けて関東に下向した折と文明三年五十一才、再び下向の折で、その時は三島に出陣中の東常縁から古今集の伝授を受けた(中略)文亀二年七月三十日八十二才、越後からの帰途に箱根湯本の宿で客死した。

当寺に埋葬された前後の模様は、同行した高弟の宗長の綴った「宗祇終焉記」に詳しい。(後略)

因みにこの墓所は昭和五一年に裾野市の史跡に指定されている。

箱根で客死した宗祇は富士山を殊のほか愛し墓所をここにと遺言したためにここに埋葬したという。墓前の句碑には、

なべて世の風をおさめよ神の春

宗祇四五〇年遠忌の時に建立

三島千句より

月の秋花の春立つ旦かな

同じく五〇〇年遠忌の時に建立　宗祇句集「老葉」より

句碑はもう一基あるが当寺より少し離れた所にあったため見落とした。

この定輪寺(じょうりんじ)は曹洞宗で山号を桃園山といい、閑静な境内にひっそりと建つ本堂、中に入って見ると案外に広い、ご本尊の裏手に宗祇法師の木像がある。薄暗くてよくは分からなかったが冠ようなものを被った穏やかな顔立ちである。静岡市外にある柴屋寺(さいおくじ)にも宗祇の木像がある。ここのは何も被っていない。宗長の像と二体並んでいる。一見の価値があると思うので、この辺に行かれたら是非見ていただきたい。柴屋寺は昔のとろろ汁で知られた丸子宿の丁字屋という大きな飯屋の所から脇道を入って少し行ったところにあって吐月蜂柴屋寺という。

話を元に戻して、定輪寺の軸を拝見する。土佐光興筆で、衣姿の僧形で若い感じである。上部の讃に、

世にふるはさらに時雨のやどりかな

うつしおくわが影ながら世の憂も

しらぬ翁ぞうらやましぬる

この寺から三島の常縁の陣所に通って、古今伝授を受けたであろう宗祇の姿が彷彿と浮かんで感無量の想いである。お茶をよばれ住職に厚く礼を述べて定輪寺を辞した。

バスが一〇分ぐらい走って裾野市と三島市との境付近ここから右手、今は家が立ち並んでいるが、常縁宗祇のころは一面の草原であった由、三島市の郷土史家沼上城山氏によるとこの辺りが常縁の陣所であったという。バスを少し徐行してもらって感慨深く眺める。

程無く三島大社に参詣し、熱函道路では左右の景色に見とれながら熱海に着き、熱海梅園で雨後の香り高い梅をゆっくり見て今晩の宿、富士屋ホテルに入った。

翌朝は八時にホテルを出発し、真鶴道路を経て鎌倉に到着して、八幡宮境内にある鎌倉国宝館を見学し、国の重要文化財の弁財天坐像、地蔵菩薩立像、弥陀三尊像など多くの彫刻、絵画、書跡を順次河合俊次先生の説明で拝観した。鶴岡八幡宮・鎌倉宮護良親王墓所などを拝観して昼食、午後は鎌倉大仏前で記念写真を撮り、一路帰路についたのである。東名高速から青空にくっきりと雄姿を見せた富士山に飽くほど見入っているうちに予定より一時間余も早く八時過ぎに帰ることができた。全員無事、何の事故もなく、また有意義で楽しい研修旅行ができたことを喜び合ったことでした。

定林寺の宗祇像

# 一泊研修旅行に学ぶもの

日置　繁

## (一) 宗祇の墓

二月二十一日からの一泊研修旅行は生憎の雨にたたれての出発であった。三島神社参拝は初度の古今伝授の地が三島の陣であったことによる。しかしいまその場所はさだかではない。

間もなく裾野市桃園の定輪寺(じょうりん)に宗祇の墓を訪ねる。島津忠夫先生著『連歌師宗祇法師』の略年譜によると宗祇は晩年八十歳の明応九年（一五〇〇）の七月に離京して九月頃越後に着きその後国府に於て古今伝授や万葉集の講釈等多くの弟子や知名人との歌道の活動が続くのであるが、その二年後八十二歳文亀二年（一五〇二）三月美濃を指して越後を後にするのである。道々高弟との同行であり歌作活動は病気を養いつつ所々で逗留しながらの旅であった。いまは恩師東常縁の没後とはいえ、美濃山田庄は師弟の恩愛とその風土が懐かしかったに違いない。七月三十日駿河から出迎えに行った常縁の孫素純（胤氏）と共に宗祇は箱根湯本の宿に入り、素純に「古今集」の伝授聞書並びに切紙、口伝を付与したが、その夜半過ぎ遂に長逝念願の郡上入りは果たせなかったのである。

八月三日この定輪寺に葬ったのである。元の墓は遺言通り富士山の見える所に建てられていたが今この小さな五輪塔は東名高速道路建設に伴う移転で定輪寺のお庭の一隅に立っている。私は宗祇の師弟愛と若き日の思い出が一杯ある郡上の地をなつかしんでくれた心情が嬉しく、又生死の哀れさが身にしみて涙をさそうのであった。

大和町の一行を定輪寺老師は喜んで迎えて下さる。この気持が宗祇の霊に通じたのか夜来の雨はここですっかりと止み熱海へと向かう。気づかった熱海の梅林も盛りを過ぎたとはいえ充分に間に合った。

## (二) イチョウの乳

熱海温泉宿での会員懇親の宴は実に楽しかった。明けて二十二日鎌倉への海岸は晴れ上って渚には白浪がおし寄せ、サーフィンの若者が幾群も目を楽しませてくれる。

鎌倉は武家政治の開祖源頼朝が初めて幕府を開いた処、半日の行動計画は当然の制約で江ノ島や鎌倉五山は割愛せられて、鶴岡八幡宮、露座の大仏、鎌倉神宮にしぼられる。美男にお在す鎌倉大仏、建武の中興に活躍せられた護良親王を祀る鎌倉神宮の親王憤死の土牢、鶴岡八幡宮での将軍源実朝が暗殺された石段、その傍に聳える国の天然記念物樹齢千二百年のイチョウの大樹、この三つは、神徳・仏徳もさることながら強烈に脳裏に焼き付くのである。

この木を指して二、三の方には見て貰ったのであるが大小無数の「イチョウの乳」なるもの（気根）が下っている。太くて長いのは一メートルをも越え凄いの一語に尽きる。私はかつてここを訪れこの大樹の奇異壮観の姿に魅せられ樹魂の逞しさにうたれました。銀杏を語るときは決まってこの樹のことを引合いに出してきました。

それでは植物の世界では変りものであるイチョウについて述べて見たいと思う。漢字で書けば公孫樹、銀杏、鴨脚樹とも書き中国原産で我が国への伝来は古い。社寺には老大木が多く現在は街路樹、公園樹としても広く用いられ風致木として秋の黄葉は美しく、又水分を含んだ厚い葉は防火樹としての効用もあるという。果実ぎんなんは茶碗蒸しにはなくてはならない珍味であることはご承知のとおりで案外身近な植物である。

さて植物学的に考察して見ると、裸子植物亜門の中でイチョウは世界中で一科一属で仲間がない。中世代に栄えた植物で生き残りの遺物である。化石として世界各地に

鶴岡八幡宮の大イチョウ

産することは同じ中国で見つかった化石の木メタセコイヤ（アケボノスギ）に似るが今のところ絶滅などは考えられない遅しさを備えている。変り者なる所以は七不思議ならぬ特性があるので挙げて見ることとする。①広葉樹のくせに針葉樹に組する、葉脈が縦に通り偏平に束になっていると解する。②数少い雌雄異株である。③花粉は粉核でなく運動する精子である。（他にソテツがある）④雌花は花弁もなく胚珠だけで飾りもない。⑤結実年齢は十八年といわれて高く生命の長い木として急がないこと象のよう。⑥若木の葉は切れ込みが深く老木は浅くなり全縁に近くなるヒイラギと同じ。⑦個体差があるが古木になると幹の枝のわきから乳（気根）を生じ年々肥大下垂奇観を呈する。工芸的には材は緻密で適当な堅さと粘り色沢は彫刻、印版、器具材として貴重である。

次に園芸的には黄葉は美しく盆栽での林相仕立ても面白い。但し一般家庭の屋敷内に植えられないのは葉が裂けることを嫌うという。また山野を利用した栽培農家も見かけるが大粒品種雌木の接木によるがよく、接木は比較的容易で私の実績では活着率七五パーセントであった。

現在大和町大間見田代には天然記念物として指定を目ざしている珍しい葉成りイチョウの後継木がある。目通り周囲九十五センチ樹高十五メートルになっている。この四・五年結実数が次第に多くなっている。葉成りイチョウは葉の中央に小さい実が一、二個成るが多くの普通の実に混じって稀に見るのである。全国では三十八本が登録されていると聞いている。岐阜県指定の葉成り銀杏はまだ指定されていない筈である。

又名皿部公民館のイチョウは多数の前記乳を生じている珍木として大切にしたい。乳は古木でも発生しない木もあり雌雄にも係りなく夫々の個性によると考えられる。

鎌倉を午後一時少し過ぎて帰路につく。雪が真白に積った富士山頂をバスの車窓に感歎の声をあげながら。

鎌倉大仏前にて

## 平成五年度 事業報告

四月八～九日　一泊二日研修旅行（四年度事業）京都嵐山の桜　四六名

五月一日　「文化財やまと」第一八号発行

五月二六日　役員会、会計監査、事業報告、決算報告、新年度事業計画、同予算案および総会の開催について

六月二六日　執行部会

七月三日　平成五年度総会および記念講演「郡上と長者について」佐藤とき子先生　三五名

七月三一日　東氏館跡庭園の除草および清掃奉仕　四一名

八月七日　薪能「くるすざくら」協賛

一〇月一一日　執行部会

一〇月二九日　「大和の祭り」出展の文化財を展示場に搬入展示完了

一〇月三〇～三一日　「大和の祭り展」開催（会場役場三階一号室）

一一月六日　日帰り一日研修旅行、東濃地区苗木城跡、蟹薬師　五四名

一一月一一日　執行部会、一泊二日研修旅行計画、役員会について

一二月一一日　役員会、事業中間報告、一泊二日研修旅行計画他

二月二一～二二日　一泊二日研修旅行、裾野市、熱海、鎌倉方面　三八名

三月一二日　大和町教育功労者として文化財関係の六氏受賞せらる。

## 平成六年度事業計画（案）

4月　執行部会、役員会、監査会

5月　日帰り研修会

6月　総会並びに研修会

7月　執行部会

8月　東氏館跡庭園除草作業奉仕　薪能協賛

9月　執行部会

10月　役員会、郷土史勉強会

11月　一泊研修旅行

12月　執行部会、役員会

2月　執行部会

3月　役員会

## 随想

# 生きがい

青地正男

入選……私の絵が入選した。絵の前に立つ私、おどろきと、よろこびの、交錯した頭に、徐々に実感がわいてくる。審査発表直後の私の姿である。

仕事一筋に生きて三十年、定年退職後は、僅かの田畠と、釣をたのしむ私が、多少、油絵に興味があることを話したことから、知人のすすめるままに、洋画クラブに参加、絵筆を持つことも、絵を描くことも、まったくの初歩から始まって三年、其の私に郡美術展出展の誘いである。

町の文化祭、グループ展などに出品、精一杯の絵も展示場では、その拙さに泣かされ、みじめなおもいばかり、美術展など思いもよらぬこととおもっていたのだが。

先輩曰く「人目に晒し批評され批判されてこそ成長あり」と、先日の風景画に「まあまあの出来、手直しして出展したら」と、アドバイス。お世辞とも、はげましの言葉ともわからぬままに、其の気になってしまった。さて返事はしたものの年がいもなく、又恥をかくのかとおもいながらも、キャンバスに向かう、描いては消し、けずっては塗る（油絵は手直しが出来るので有難い）暇さえあれば絵筆を持つ。見る、とにかく真剣そのもの、そのかいあったのか、ついに入選の快挙である。

年老いると共に、引込み思案で灰色の人生もうかぶが、誰しもが、自分自身も、気付かない何かを秘めているかも知れない。趣味を生かし、やる気と努力で、老後の生きがいを求めるのも、又たのしきかなと、おもうと共に、次の目標にむかって、挑戦の意欲もわいてくる今日このごろである。

# 新しく町重要文化財に指定された一五点

昨年度につづいて、本年町の重要文化財一五点が指定された。今回は初めて建造物四点（寺二、神社二）が指定され、当町の文化財にさらに重厚さを加えることになりました。西念寺の鼓堂には明和五年（一七六八）の銘が墨書してある太鼓がつるされており、重層の建造物としては稀な建物である。

**〈建造物〉**

○長徳寺本堂（万場）享保十二年（一七二七）

○西念寺本堂（古道）享保二十一年（一七三六）

○西念寺鐘堂・太鼓堂（江戸の末期）

○明建神社本殿（牧）享保七年（一七二二）

○名皿部白山神社本殿　安永六年（一七七七）

**〈書　跡〉**

○西念寺紙本墨書実如上人六字名号　室町時代

○西念寺紺紙金泥蓮如上人六字名号（古道）室町時代

○応徳寺紙本墨書蓮如上人六字名号（栗巣）室町時代

○応徳寺紙本墨書蓮如上人十字名号（栗巣）室町時代

○清浄寺紙本墨書蓮如上人六字名号（大間見）室町時代

○長徳寺紙本墨書蓮如上人六字名号（万場）室町時代

○長徳寺紺紙金泥十字名号（万場）室町時代

**〈絵　画〉**

○応徳寺絹本著色阿弥陀如来立像（栗巣）大永二年（一五二二）

○応徳寺絹本著色蓮如上人座像（栗巣）寛永十六年（一六二八）

○恩善寺絹本著色宣如上人座像（徳永）寛文五年（一六六五）

なお、文化財保護審議会が、教育委員会に答申中のものに左の五点がある。

○清浄寺本堂（大間見）享保十三年（一七二八）

○山田助雄道場絹本著色阿弥陀如来立像（剣）永正十二年（一五一五）

○山田助雄道場紙本墨書蓮如上人六字名号（剣）

○山田助雄道場紙本墨書実如上人六字名号（剣）

○筧政之助（大屋道場）紙本墨書蓮如上人六字名号（栗巣）

西念寺の鐘堂・太鼓堂

# 文芸欄

## 短歌

**簇　清子**

通販で取り寄せ植えし数本の椿は
一本残りて咲けり

**大坪俊江**

落ちてなおそのやわ肌の端々し紅
冴えと幼なき椿

**井俣初枝**

落つる音落ちる姿はいまだ見ずそ
の紅の椿に触れな

**鷲見鈴子**

風花を遊ばす風の椿谷つんと澄ま
してつぼみひかりぬ

**矢野原幸子**

何のためなどと理由はありませぬ
薮椿の花ひとつ拾うに

**日置智恵子**

椿の実お茶の実ナラの実くるみの
実肩よせあいて幼の宝

**木島泉**

花の芯通る空洞てのひらの椿そこ
から終わりを急ぐ

**桑田アサ子**

舗道に落つ椿の花のみづみづしサ
ラリーマンの悲哀に似しよ

**小池久江**

春光の葉にはね返る一瞬に視界の
中の椿は眩し

**金子政子**

五輪塔に秘められしいにしえ語り
つつ里人つどえりうつつ離れて
目鼻だちさだかなき木蛇寺御本尊
世の変遷を無言に語らす

**土松新逸**

よく晴れし鎌倉の空さわやかにみ
な笑顔なりバスに並びて
大仏の美しきみ顔よく見ゆる二階
の部屋に昼食おいし
われら待ちいませしごとく大仏様
春日うらうらやさしきみ顔
大仏は美男におわすと歌いませし
うべないにつつしばし仰ぐも

## 俳句

**木島泉**

どろんこの仔猫がのぞく姫女苑
牡丹の終りいそがせ雨あがる
いつか逝くうつし身に美し蝉の声

**日置繁**

探梅や宗祇の墓へ雨催ひ
山荘のもり青蛙鏡池
流鏑馬（やぶさめ）の矢も秋風に
東大社

**黒岩きくゑ**

葉牡丹のうず立ち上る一夜城
洛北の行く手明るき春時雨
文楽の木偶が目を剥く戻り梅雨

**田中まさを**

落椿紅のほどよく地を染めて
城跡や雨に堪えいる忘れ草
百姓をして健やかや草を取る

**横枕千代子**

町並に寒行の鈴ひびきけり
つかの間の話終りぬ春炬燵
匂やかな桜木陰に碑は古りて

**井俣初枝**

城のなき城山春の雪舞へり
夕桜旅の嵯峨野に親しめり
目鼻欠け馬頭観音冬苺

**直井すゞ江**

大賀蓮千年のなぞ秘めしまま
花の雲川湊ある和紙の里
小豆粥大師の逸話と湯気すゝる

**山下照代**

老鶯や阿千葉の里の夜明そめ
忘れ草古今の里で友と逢ふ
黄落の色のきはみを書にはさむ

**田中裕**

桜咲き亡き妻静かに眺めゐし
いろいろの事伝えたく梅雨こたつ
山椒味噌辛きに妻の顔浮かぶ

**本田村人**

水攻めの如き水田の一部落
傘たたむ紫陽花寺の一の門
木槿道町起してふ紅と白

**河合芳江**

花吹雪出雲阿国の男舞
春嵐寂聴庵は静もりて
実石榴や千の子を抱く訶梨帝母

**山田昌枝**

夫と居て二月の御堂の広さかな
実母散喉下りゆく四温かな
から松に穂先ゆれをり皐月晴れ

**有代信吾**

観念の目を見開きて蛇打たる
木下闇抜け放埒の身をさらす
一灯の闇を照して蛾を死なす

**桑田和子**

牡丹の香り残して散りし園
ゆらゆらと植田に揺れて団欒（まどい）の灯
束の間を蛍に惹かれゐる歩み

平成六年　四月末日現在

# 会員名簿

（順序不同）

―剣―

山下運平（顧問）　二四〇六
簗　勝美（顧問）　二〇三一
村瀬喜八　二一一二八
山下真一　三四九五
河合俊次（理事）　二二四六
畑中澄子（理事）　二五〇七
畑中定夫　二一一六八
小池久江　二五七六
山下ふみえ　三三二七
加藤正恵　二一一〇七
高橋　明　二四八八
日置照郎　二〇七二
加藤文蔵　二八〇二
佐藤光一（理事 会計）　三三〇一
田中　裕　二二〇〇
高橋義一（理事）　三七九二
河合　恒　二三五八
河合芳英　二三〇四
加藤小弐　二三二九
奥村千代子　二〇二二
武藤正文（理事）　三一九〇
河合久子　二一一〇三
田仲龍子　二三六一
山下昭代　二四〇六
畑中節子　四一五六
佐藤八重子　三二〇一
間関ゆき　二三四七
畑中文子　二三四一
畑中初枝　三四七四
新蔵　守　二三七五
野田八重子　二一六二

―大間見―

村井正蔵（監事）　二三二三
青木新三　二四三六
日置　繁（理事 書記）　二二五四
大野紀子　二二三〇
野田英志（理事）　二二八五
小野江選量（理事）　二七二六
清水一作　三〇八六
山下直美　三九三八
池田充彦　三〇九〇
小野江勉　二七二五
池田栄枝　二二八五
池田恒純　二八七九
日置智恵子（理事）　三〇五二
坪井政夫　四〇九二
松井賢雄（理事）　三九九一
古田　忠　四〇九〇
井口一雄　四〇二〇
藤代順行　三〇六〇
池田柳松　二三五五
大野一道　二二三〇
佐藤義子　四〇一〇
玉木吉郎　三四一五
青木ふじ枝　二二〇三
小野木花子　二七四七
日置ふじゑ　二二五四

―小間見―

平沢　勤（理事）　三九三七
島崎英一　三〇三七

―万場―

畑中浄園（副会長）　二四四一
畑中真澄　二四四一
石神尭生　二四一三
稲葉春吉　二五〇三
黒岩きくゑ　二四六〇
筧　明代　二五三二
三島秋男（理事）　二四六一
桑田和子　二四一九
桑田渥見　二四四六
桑田信夫　二四一八
黒岩弘美　二四五八
井俣初枝（理事）　二七五八
青地正男　二四四七
大井静子　二三三八
大井正明　二八九四
簗　清子　四一七〇
田中なみ　三六二〇
桑田アサ子　二四三九
井上妙子　三五〇八

―徳永―

木　島　泉（理事）　四一八二
鷲見鈴子　二〇〇五
鷲見おと　二一一八九
直井すゞ江　三五九二
矢野原幸子（理事）　二〇七七
田中まさを　二〇六七
水野志づ子　二六一〇
山内孝一　二六一六
木島洋女　二五九一
土松新逸（会長）　二七三一
遠藤賢逸　二一一二
渡辺明夫　二六九五
木島三郎　三五九〇
矢野原吉夫　二一一三九
村瀬弥一（理事）　二六〇二

―河辺―

清水幸江（理事）　二〇一九
横枕千代子　二三四九
清水テル子　二〇二一
前田　孝　二一一〇一
前田　鈴　三六六六
臼田とも子（理事）　二二五〇
臼田百合子　二〇四六
岩谷敏子　二〇六三
岩谷ゆう　二三八八
岩谷ひとみ　二六八三
岩谷千代子　二一一一

―神路―

森　忠敬（顧問）　二〇八三
臼田尊徳　三七三〇
羽生　清　二二七一
山田真人（理事）　二一一四

―牧―

金子政子　三四二六
滝日準一（理事）　二七〇五
粟飯原高照　二三六二
土松康二　二七二九
日置貞一　二六六二
土松貞二　三九八〇
日置　昇　三六三六
遠藤米吉　三六三七
遠藤光平　三九八一
遠藤周一　二八九〇
滝日義一（理事）　三〇六二
滝日　治　三四〇六
田口勇治　三九五〇
斎藤太門　三九二二
日置一郎　三六七四
松森　茂　三九二三
加藤一男　二八七〇
清水　定　二七一〇
日置元衛　三四一七
粥川　溜　三三七八
本田欽一（理事）　三一六〇
野田一末　三〇四三
尾藤佐紀子　二三五三

―栗巣―

島崎増造（監事）　二二三六
増田洋子　四〇四一
筧政之助（理事）　四〇三一
中山周左ェ門　二七二八
武田信康　二二八四
鷲見豊夫　二七八八
野田光誠　四〇二七

―古道―

細川　優（理事）　二八六一
清水克巳　二八六二
清水行雄　三九〇八
歳藤堅正　三九七九

金子藤男　三〇七五
長谷川順一　三九一四

―名皿部―

有代信吾（副会長）　三七九一
有代和夫　二二〇一
尾藤　由　三四三〇
森下正則　三四一三
下広茂一　三八九五
佐尾チドリ（理事）　三五四四
立石春枝　三八八五

―島―

森藤　幸（顧問）　二七〇六
森藤雅毅（理事）　二六八四
須甲甚一（理事）　二六六七
山田長次（理事）　三六四八
山田昌枝　三六四八
森　数雄　二五五四
山田　良　二七九一
田中　篤　二七九二
奥田昌明　二五二〇
直井篤美　二六二二
此島修二　三六五九

## 平成5年度決算書

（収入の部）　（単位：円）

| 項目 | 予算額 | 決算額 | 増減 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 102,043 | 102,043 | 0 | |
| 会費 | 1,500,000 | 1,567,500 | 67,500 | |
| 会員費 | 300,000 | 319,000 | 19,000 | 正会員 2,000×157<br>家族会員 1,000×5 |
| 特別会員費 | 1,200,000 | 1,248,500 | 48,500 | 日帰研修 5,000×54・宿泊研修 25,000× 38・役員会 1,500×19 |
| 補助金 | 50,000 | 50,000 | 0 | |
| 寄付金 | 1,000 | 28,508 | 27,508 | 土松会長 20,000・森藤順問 5,000岐阜バス 3,508 |
| 諸収入 | 1,957 | 314 | △1,643 | 預金利子 |
| 合計 | 1,655,000 | 1,748,365 | 93,365 | |

（支出の部）

| 項目 | 予算額 | 決算額 | 増減 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 会議費 | 110,000 | 82,797 | △27,203 | |
| 総会費 | 50,000 | 19,304 | △30,696 | |
| 役員会費 | 60,000 | 63,493 | 3,493 | |
| 事業費 | 1,420,000 | 1,451,388 | 31,388 | |
| 研修費 | 1,350,000 | 1,347,528 | △2,472 | 日帰研修　280,000<br>宿泊研修　963,508<br>研修助成　104,020 |
| 会報発行費 | 70,000 | 67,980 | △2,020 | |
| 記念事業費 | 0 | 35,880 | 35,880 | |
| 事務局費 | 35,000 | 9,181 | △25,819 | |
| 消耗品費 | 5,000 | 4,371 | △629 | |
| 通信費 | 20,000 | 4,810 | △15,190 | |
| 旅費 | 10,000 | 0 | △10,000 | |
| 助成金 | 80,000 | 72,000 | △8,000 | |
| 予備費 | 10,000 | 25,000 | 15,000 | 郡上史談増刷代 15,000・香典 10,000 |
| 合計 | 1,655,000 | 1,640,366 | △14,634 | |

## 平成6年度予算書（案）

（収入の部）　（単位：円）

| 項目 | 予算額 | 前年度予算額 | 増減 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 107,999 | 102,043 | 5,956 | |
| 会費 | 1,545,000 | 1,500,000 | 45,000 | |
| 会員費 | 315,000 | 300,000 | 15,000 | 正会員 2,000×155<br>家族会員 1,000×5 |
| 特別会員費 | 1,230,000 | 1,200,000 | 30,000 | 日帰研修 5,000×40・宿泊研修 25,000×40・役員会 1,500×20 |
| 補助金 | 50,000 | 50,000 | 0 | |
| 寄付金 | 1,000 | 1,000 | 0 | |
| 諸収入 | 1,001 | 1,957 | △956 | |
| 合計 | 1,705,000 | 1,655,000 | 50,000 | |

（支出の部）

| 項目 | 予算額 | 前年度予算額 | 増減 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|
| 会議費 | 120,000 | 110,000 | 10,000 | |
| 総会費 | 50,000 | 50,000 | 0 | |
| 役員会費 | 70,000 | 60,000 | 10,000 | |
| 事業費 | 1,460,000 | 1,420,000 | 40,000 | |
| 研修費 | 1,380,000 | 1,350,000 | 30,000 | 日帰研修・宿泊研修・研修助成 |
| 会報発行費 | 80,000 | 70,000 | 10,000 | |
| 記念事業費 | 0 | 0 | 0 | |
| 事務局費 | 35,000 | 35,000 | 0 | |
| 消耗品費 | 5,000 | 5,000 | 0 | |
| 通信費 | 20,000 | 20,000 | 0 | |
| 旅費 | 10,000 | 10,000 | 0 | |
| 助成金 | 80,000 | 80,000 | 0 | |
| 予備費 | 10,000 | 10,000 | 0 | |
| 合計 | 1,705,000 | 1,655,000 | 50,000 | |

収　入［1,748,365］　－　支　出［1,640,366］＝107,999（次年度繰越金）

## 編集後記

◆「今年花落ちて顔色改まり、明年花開くも復た誰かあらん……」…古人復た洛城の東に無く、今人還た対す落花の風」花が咲いて散ってゆくころ、思いおこす唐詩の一節。

◆若葉・青葉の間に山つつじの花が、ひときわ映えて咲いています。

会員の皆様にはお変わりございませんか。今年も会報第一九号をおとどけすることになりました。一年の歳月は一瞬に過ぎて、無常迅速の感を深くします。

◆昨年の町の文化祭には、町内の各地区の祭りの獅子頭や、各種の面を展示し、隣室では祭りのビデオを放映し、多くの町民の方から好評を博しました。これひと重に会員各位のご助力のたまもので、深く感謝しています。

◆本号も所定のページを越えるほどになりました。今後はできるだけ多くの会員の投稿を願ってやみません。

◆やがてつゆどきがきます。何とぞご自愛の程を願って後記とします。（五月中浣畑中記）

「財やまと」第一九号　平成六年五月一五日発行　発行者／大和町文化財保護会　代表者／土松新逸　印刷者／白鳥印刷